

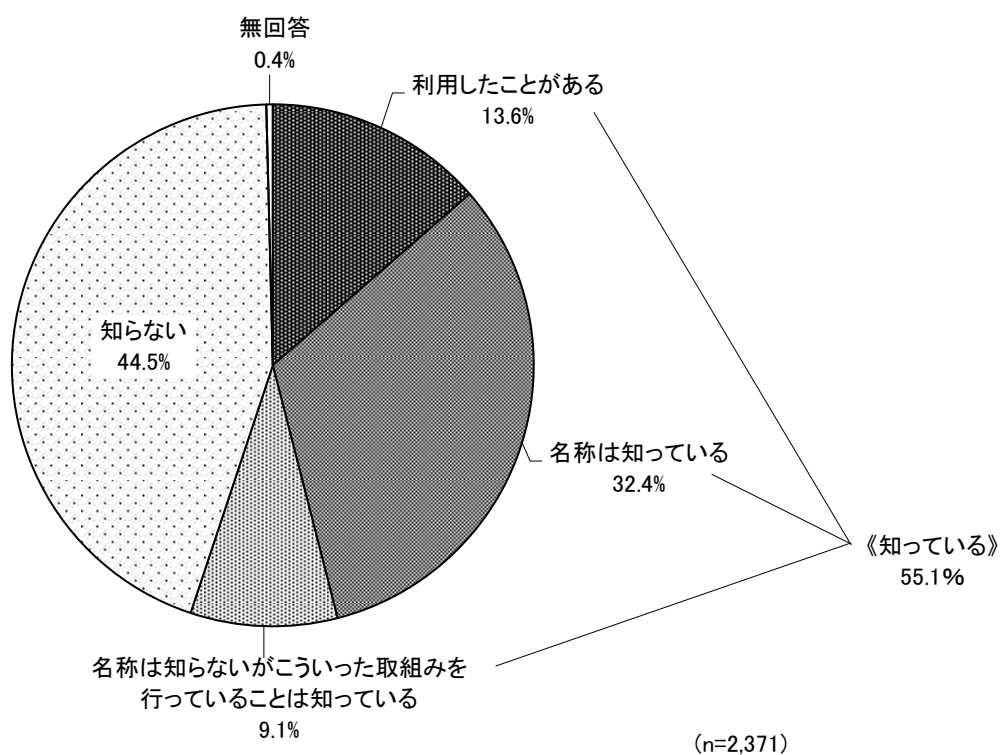
5. 福祉と医療

(1) 「福祉の相談窓口」の認知度

◎ 《知っている》が5割半ば、「利用したことがある」は1割を超える

問13 あなたは、区内28地区で実施しているまちづくりセンター、あんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）、社会福祉協議会が連携して相談を受ける「福祉の相談窓口」を知っていますか。（〇は1つ）

図5-1-1

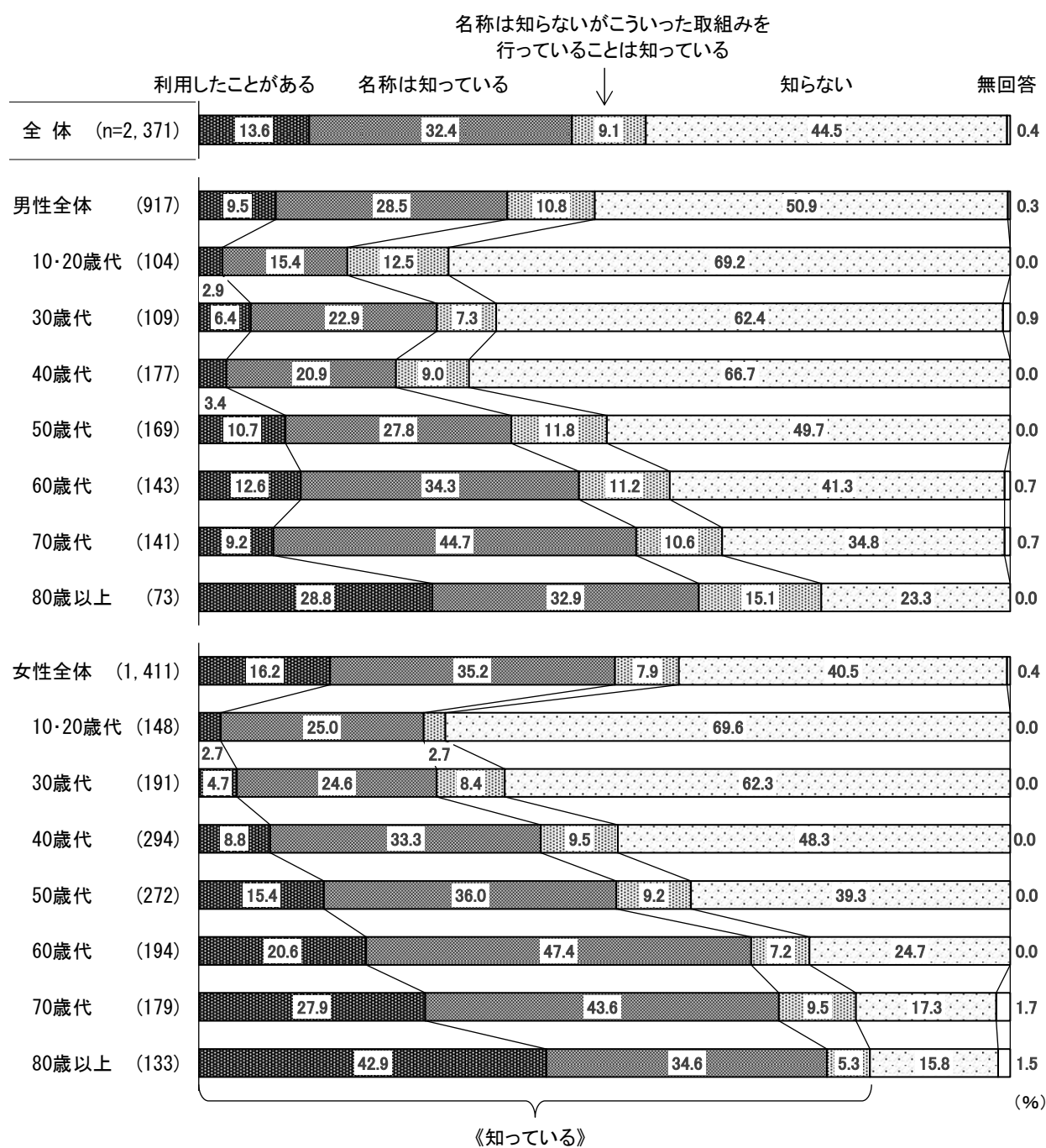


〈調査結果〉

「福祉の相談窓口」の認知度を聞いたところ、「名称は知っている」（32.4%）、「利用したことがある」（13.6%）、「名称は知らないがこういった取組みを行っていることは知っている」（9.1%）を合わせた《知っている》（55.1%）が5割半ば、「知らない」（44.5%）は4割半ばとなっている。

（図5-1-1）

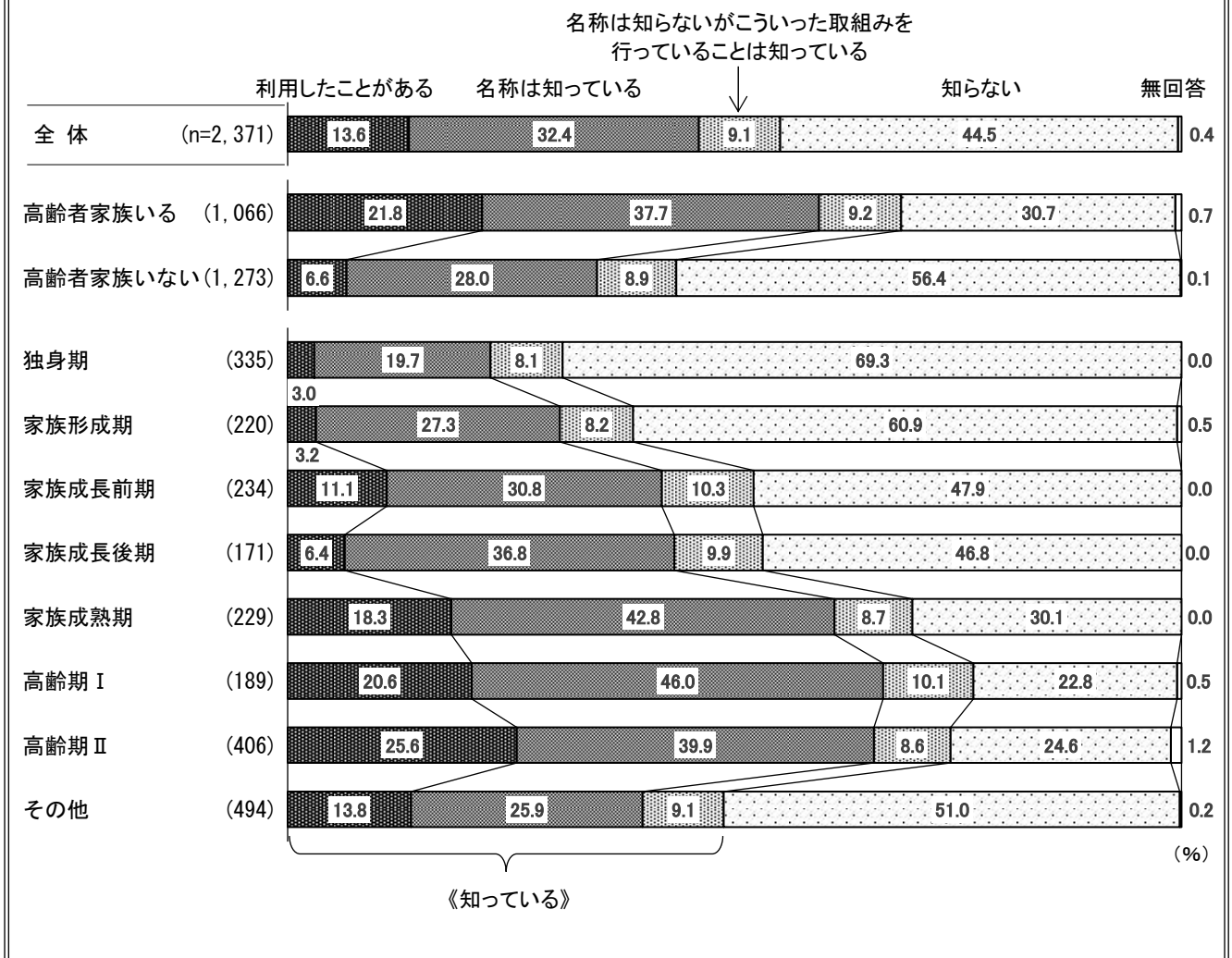
図5-1-2 「福祉の相談窓口」の認知度(性・年齢別)



〈調査結果〉

性・年齢別にみると、《知っている》は男女とも10・20歳代が最も低く、男性は40歳代から、女性は10・20歳代から年代が上がるにつれ高くなる傾向がみられ、女性の70歳代以上で8割を超え、男性の80歳以上で8割近くとなっている。「利用したことがある」は女性の80歳以上で4割を超え、男性の80歳以上と女性の70歳代で3割近く、女性の60歳代でほぼ2割となっている。(図5-1-2)

図5-1-3 「福祉の相談窓口」の認知度(高齢家族の有無別・ライフステージ別)



〈調査結果〉

高齢家族の有無別にみると、高齢家族がいる世帯は「利用したことがある」が2割を超え、「名称は知っている」が4割近くで、高齢家族がいない世帯より高い。

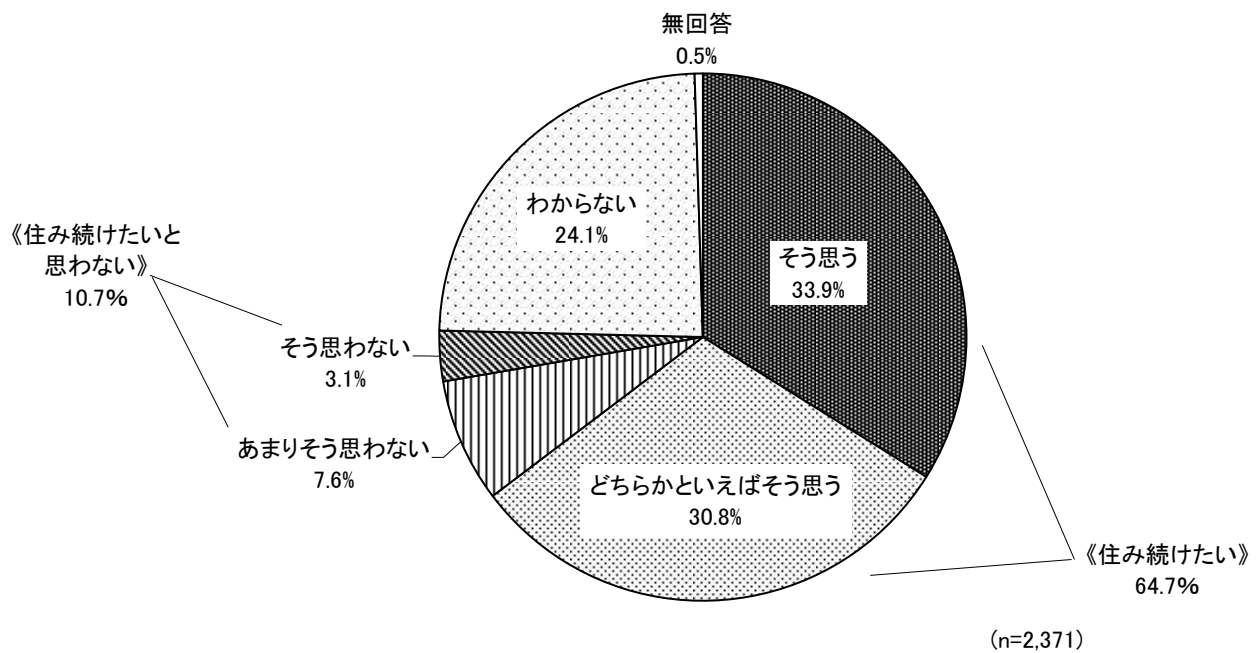
ライフステージ別にみると、「利用したことがある」は高齢期Ⅱで2割半ば、高齢期Ⅰではほぼ2割となっている。《知っている》は高齢期Ⅰが8割近く、高齢期Ⅱが7割半ば、家族成熟期が7割、家族成長前期と家族成長後期が5割を超えている。(図5-1-3)

(2) 介護や医療必要時の居住意向

◎ 《住み続けたい》が6割半ば

問14 あなたは、介護や医療が必要になっても世田谷区に住み続けたいですか。(○は1つ)

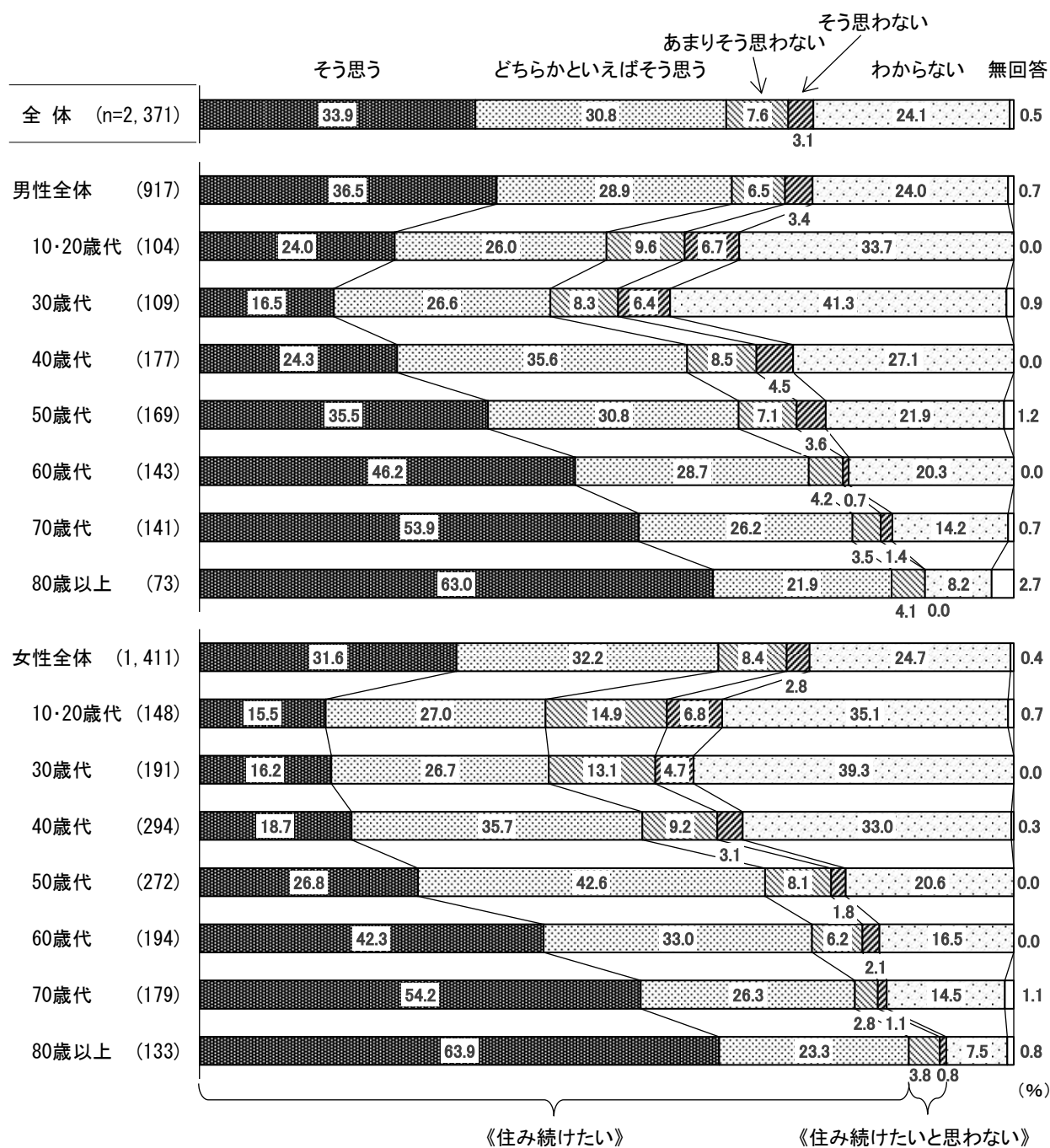
図5-2-1



〈調査結果〉

介護や医療必要時の世田谷区への居住意向について聞いたところ、「そう思う」(33.9%)と「どちらかといえばそう思う」(30.8%)を合わせた《住み続けたい》(64.7%)が6割半ば、「あまりそう思わない」(7.6%)と「そう思わない」(3.1%)を合わせた《住み続けたいと思わない》(10.7%)はほぼ1割となっている。(図5-2-1)

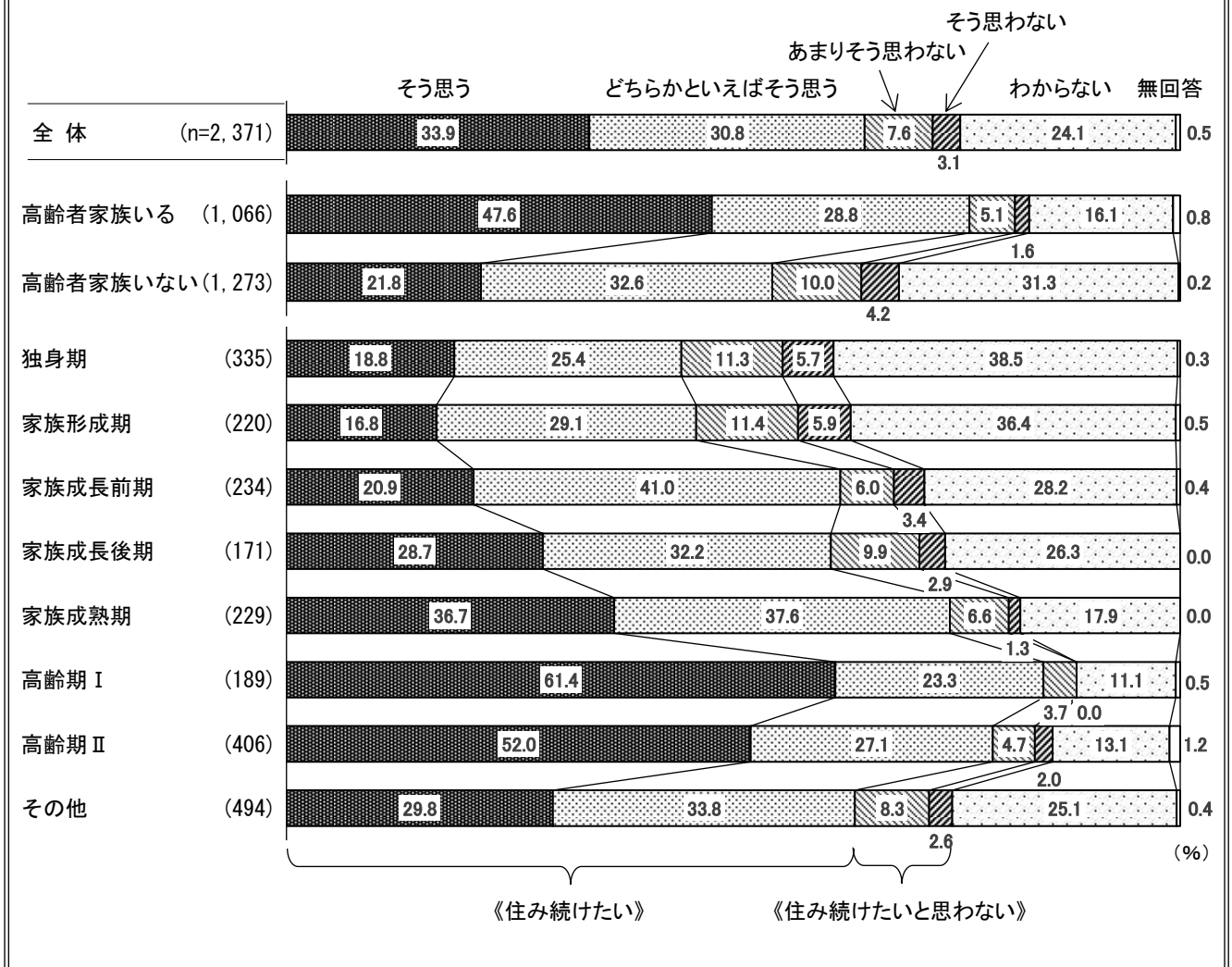
図5-2-2 介護や医療必要時の居住意向(性・年齢別)



〈調査結果〉

性・年齢別にみると、年代が上がるにつれ《住み続けたい》が高くなる傾向にあり、女性の80歳以上が9割近く、男性の80歳以上が8割半ば、70歳代の男女が8割となっている。《住み続けたいと思わない》は、女性の10・20歳代は2割を超え、女性の30歳代が2割近く、男性の10・20歳代と30歳代が1割半ばとなっている。(図5-2-2)

図5-2-3 介護や医療必要時の居留意向(高齢家族の有無別・ライフステージ別)



〈調査結果〉

高齢家族の有無別にみると、《住み続けたい》は高齢家族がいる世帯で7割半ば、高齢家族がいない世帯で5割半ばである。「そう思う」は高齢家族がいる世帯で5割近くとなっている。

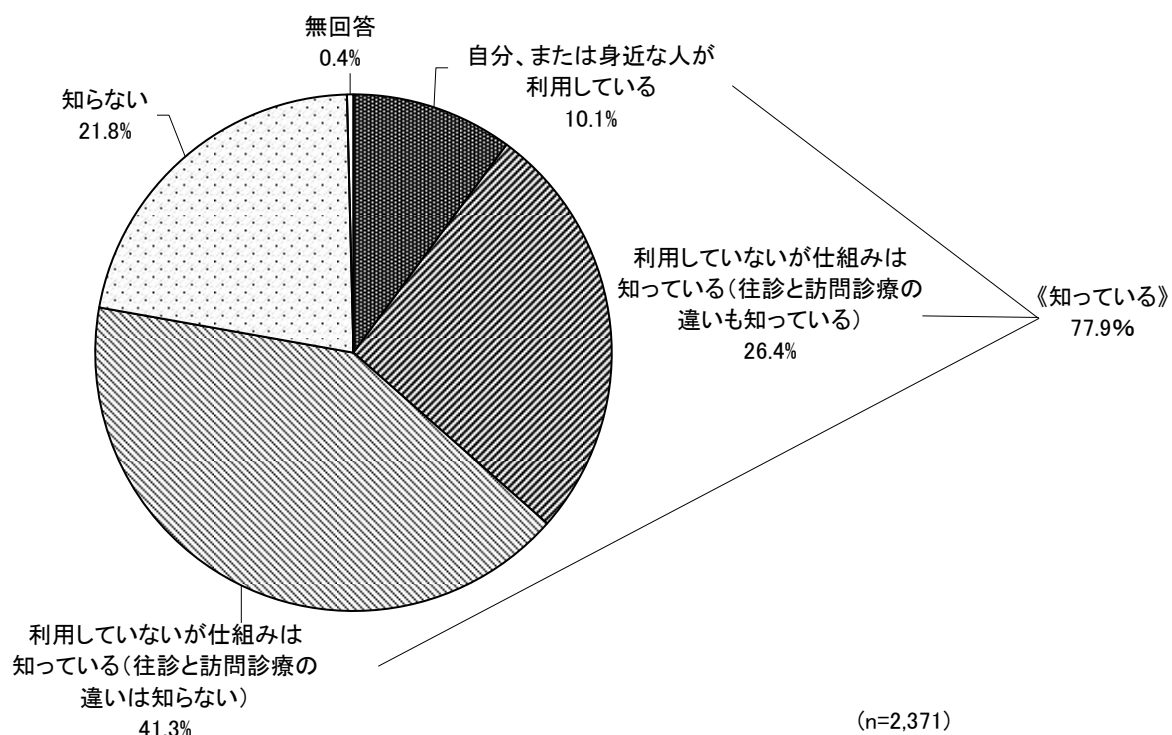
ライフステージ別にみると、《住み続けたい》は高齢期 I が8割半ば、高齢期 II がほぼ8割で、そのうち、「そう思う」は高齢期 I が6割を超え、高齢期 II が5割を超えている。《住み続けたいと思わない》は独身期と家族形成期が2割近くとなっている。(図5-2-3)

(3) 「在宅医療」の認知度

◎ 《知っている》が8割近く、「自分、または身近な人が利用している」は1割

問15 あなたは、訪問診療や訪問看護を受けながら自宅で療養する「在宅医療」を知っていますか。
(○は1つ)

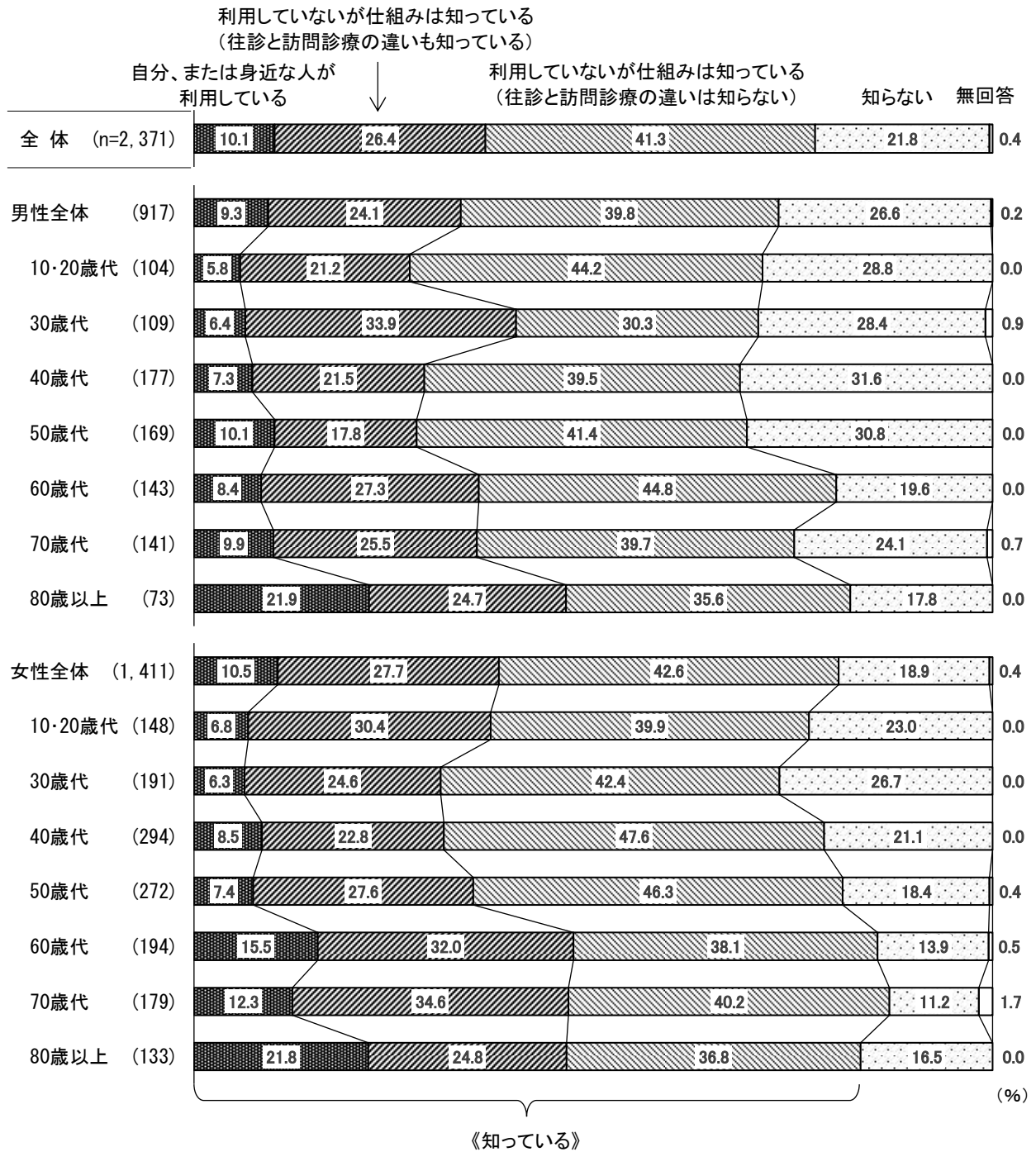
図5-3-1



〈調査結果〉

「在宅医療」の認知度を聞いたところ、「利用していないが仕組みは知っている(往診と訪問診療の違いは知らない)」(41.3%)が4割を超え、「利用していないが仕組みは知っている(往診と訪問診療の違いも知っている)」(26.4%)、「自分、または身近な人が利用している」(10.1%)と合わせた《知っている》(77.9%)が8割近くとなっている。(図5-3-1)

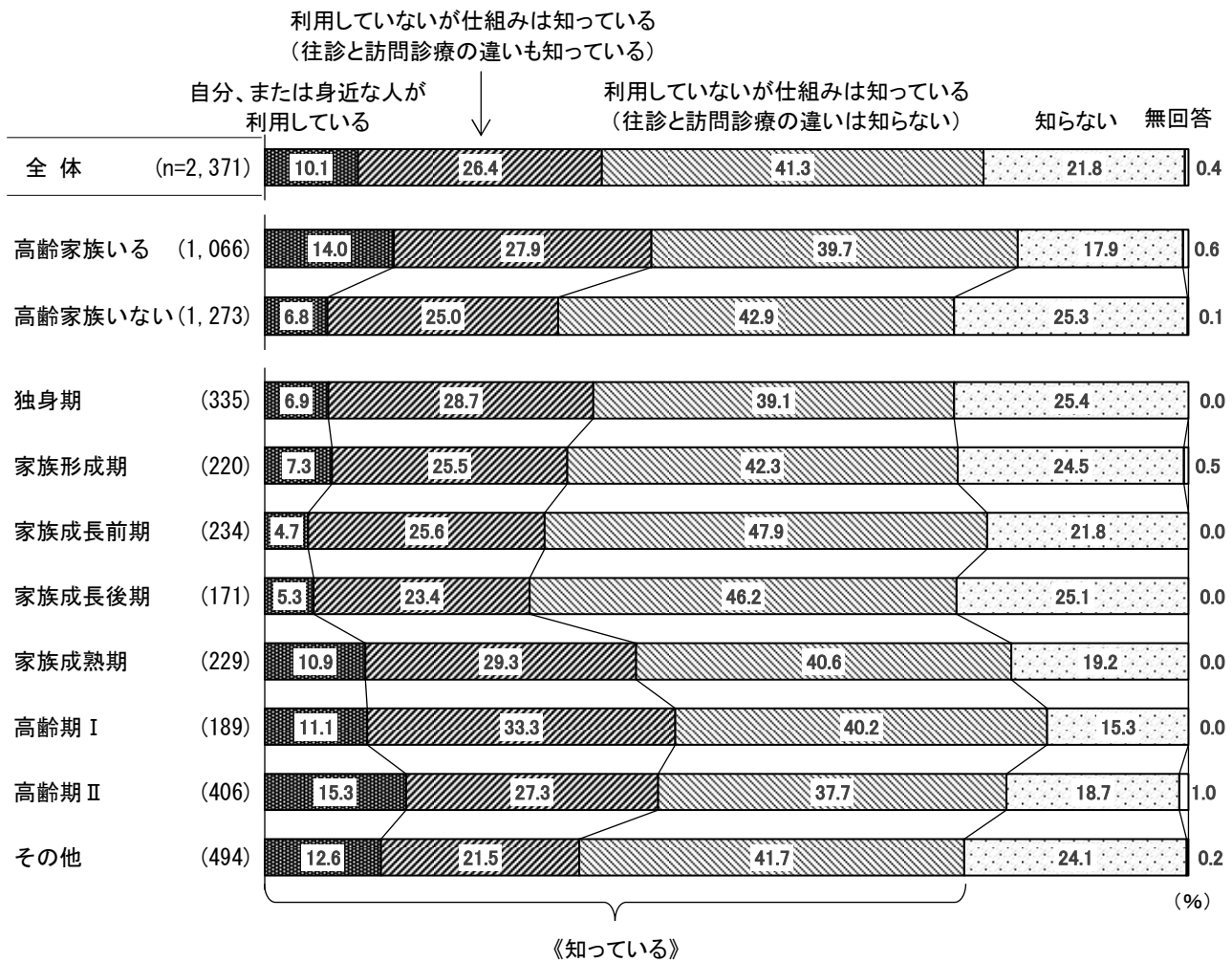
図5-3-2 「在宅医療」の認知度(性・年齢別)



〈調査結果〉

性・年齢別にみると、《知っている》は女性全体がほぼ8割、男性全体が7割を超え、いずれの年代も男性より女性の方が高く、特に女性の70歳代は9割近い。「自分または身近な人が利用している」は男女とも80歳以上が2割を超えている。(図5-3-2)

図5-3-3 「在宅医療」の認知度(高齢家族の有無別・ライフステージ別)



〈調査結果〉

高齢家族の有無別にみると、「自分、または身近な人が利用している」の割合は高齢家族がいる世帯で1割半ばとなり、高齢家族がいない世帯のほぼ倍となっている。

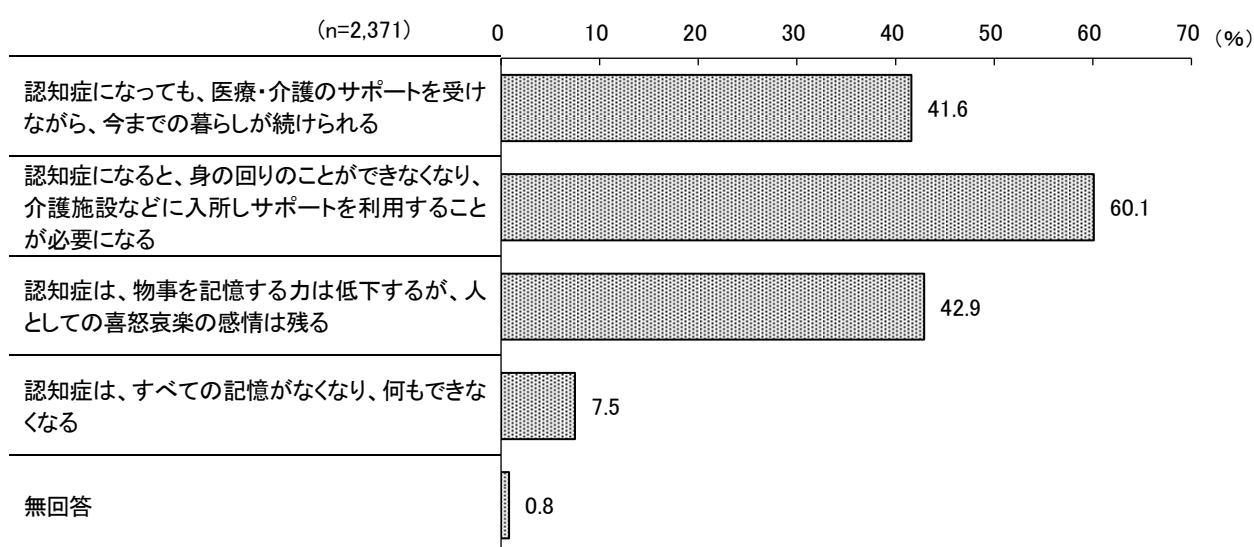
ライフステージ別にみると、「自分、または身近な人が利用している」と「利用していないが仕組みは知っている(往診と訪問診療の違いも知っている)」を合わせた割合は、家族成熟期、高齢期 I、高齢期 II では4割以上で、他の層よりも高くなっている。(図5-3-3)

(4) 認知症のイメージ

◎「認知症になると、身の回りのことができなくなり、介護施設などに入所しサポートを利用することが必要になる」が6割

問16 認知症に対してどのような印象（イメージ）をお持ちですか。（〇はいくつでも）

図5-4-1



<調査結果>

認知症のイメージについて聞いたところ、「認知症になると、身の回りのことができなくなり、介護施設などに入所しサポートを利用することが必要になる」（60.1%）が6割と最も高く、以下、「認知症は、物事を記憶する力は低下するが、人としての喜怒哀楽の感情は残る」（42.9%）、「認知症になっても、医療・介護のサポートを受けながら、これまでの暮らしが続けられる」（41.6%）と続く。「認知症は、すべての記憶がなくなり、何もできなくなる」（7.5%）は1割未満と低い。（図5-4-1）

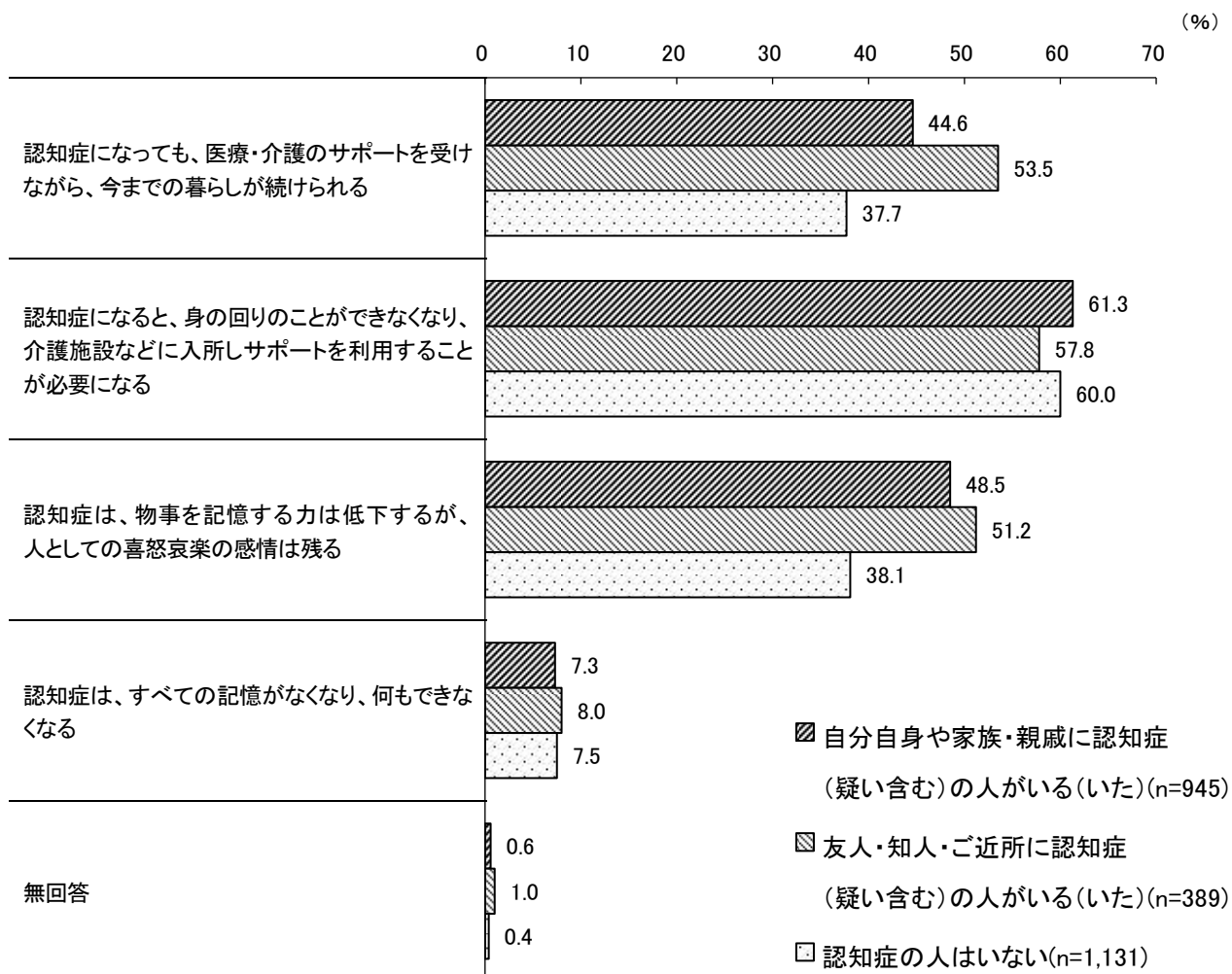
表5-4-1 認知症のイメージ(性・年齢別)

							(%)	
		n	今までの暮らしが続けられる	介護のサポートを受けながら、医療・介護のサポートが必要になる	認知症になると、身の回りのことができなくなり、身の回りのことを人に頼らなければならない	認知症は、物事を記憶する力は低下するが、人としての喜怒哀楽の感情は残る	認知症は、物事を記憶する力なく、何もしないで過ごすことになる	無回答
全体		2,371	41.6	60.1	42.9	7.5	0.8	
性・年齢別	男性全体	917	37.8	60.1	38.5	7.5	1.0	
	10・20歳代	104	18.3	61.5	35.6	6.7	-	
	30歳代	109	35.8	65.1	35.8	12.8	2.8	
	40歳代	177	29.9	70.1	35.0	5.1	0.6	
	50歳代	169	43.2	62.1	42.0	6.5	0.6	
	60歳代	143	42.0	55.2	37.1	5.6	0.7	
	70歳代	141	46.8	53.9	40.4	9.2	2.1	
	80歳以上	73	50.7	42.5	46.6	9.6	-	
	女性全体	1,411	43.5	60.9	45.5	7.6	0.6	
	10・20歳代	148	23.0	79.1	33.8	8.1	-	
	30歳代	191	36.6	72.8	37.2	11.0	-	
	40歳代	294	37.1	66.0	44.2	8.5	0.3	
	50歳代	272	44.9	61.8	44.5	4.0	0.7	
	60歳代	194	53.1	55.2	46.9	5.7	0.5	
70歳代	179	59.2	40.2	62.0	8.9	0.6		
80歳以上	133	52.6	46.6	51.1	8.3	2.3		

<調査結果>

性・年齢別にみると、「認知症になると、身の回りのことができなくなり、介護施設などに入所しサポートを利用することが必要になる」は男女とも50歳代以下が6割～7割台で60歳代以上より高い。「認知症は、物事を記憶する力は低下するが、人としての喜怒哀楽の感情は残る」は女性の70歳代で6割を超え、80歳以上で5割を超えている。「認知症になっても、医療・介護のサポートを受けながら、今までの暮らしが続けられる」は女性の70歳代でほぼ6割、60歳代と80歳以上で5割を超え、男性の80歳以上でほぼ5割となっている。(表5-4-1)

図5-4-2 認知症のイメージ(周囲の認知症の有無別)



<調査結果>

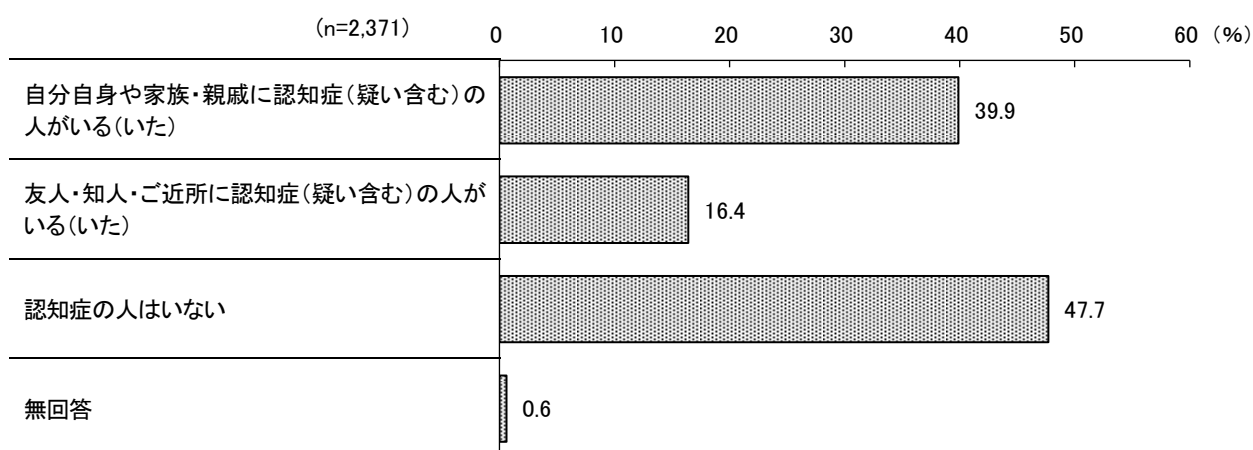
周囲の認知症の有無別にみると、「認知症になると、身の回りのことができなくなり、介護施設などに入所しサポートを利用することが必要になる」は周囲の認知症の有無に関わらず6割前後となっている。周囲に認知症の人がいない層といる層で差があるものは「認知症になっても、医療・介護のサポートを受けながら、今までの暮らしが続けられる」と「認知症は、物事を記憶する力は低下するが、人としての喜怒哀楽の感情は残る」で、いない層が3割台、いる層が4割～5割台である。(図5-4-2)

(5) 周囲の認知症の人の有無

◎「認知症の人はいない」が5割近く

問17 あなたの周りに認知症の人はいますか。(〇はいくつでも)

図5-5-1



<調査結果>

周囲の認知症の人の有無について聞いたところ、「認知症の人はいない」(47.7%)が5割近くで最も高い。認知症の人がいる中では、「自分自身や家族・親戚に認知症(疑い含む)の人がいる(いた)」(39.9%)が4割、「友人・知人・ご近所に認知症(疑い含む)の人がいる(いた)」(16.4%)が1割半ばとなっている。(図5-5-1)

表5-5-1 周囲の認知症の人の有無(性・年齢別)

(%)

	n	自分自身や家族・親戚に認知症(疑い含む)の人がいる(いた)	友人・知人・ご近所に認知症(疑い含む)の人がいる(いた)	認知症の人はいない	無回答	
全体	2,371	39.9	16.4	47.7	0.6	
性・年齢別	男性全体	917	36.5	13.8	52.5	0.5
	10・20歳代	104	28.8	2.9	68.3	-
	30歳代	109	46.8	14.7	42.2	1.8
	40歳代	177	35.6	9.6	56.5	-
	50歳代	169	37.3	16.0	49.7	0.6
	60歳代	143	50.3	18.9	35.7	-
	70歳代	141	25.5	17.7	61.0	0.7
	80歳以上	73	27.4	15.1	58.9	1.4
	女性全体	1,411	42.0	18.2	44.6	0.6
	10・20歳代	148	39.9	6.8	54.7	-
	30歳代	191	42.4	13.6	48.7	-
	40歳代	294	38.1	16.7	50.3	-
	50歳代	272	42.6	18.0	42.6	1.1
	60歳代	194	54.6	22.7	32.0	-
70歳代	179	38.0	24.0	43.6	1.1	
80歳以上	133	38.3	27.1	38.3	3.0	

<調査結果>

性・年齢別にみると、「認知症の人はいない」は男性全体が5割を超え、女性全体が4割半ばで、男性の方が女性より高く、特に男性の10・20歳代は7割近く、70歳代は6割を超えている。「自分自身や家族・親戚に認知症(疑い含む)の人がいる(いた)」は女性の60歳代が5割半ば、男性の60歳代が5割となっている。(表5-5-1)

表5-5-2 周囲の認知症の人の有無(高齢家族の有無別)

(%)

		n	自分自身や家族・親戚に認知症(疑い含む)の人がいる(いた)	友人・知人・ご近所に認知症(疑い含む)の人がいる(いた)	認知症の人はいない	無回答
全 体		2,371	39.9	16.4	47.7	0.6
高齢家族の有無	高齢家族いる	1,066	39.7	20.2	45.1	0.9
	高齢家族いない	1,273	39.8	13.4	50.0	0.3

<調査結果>

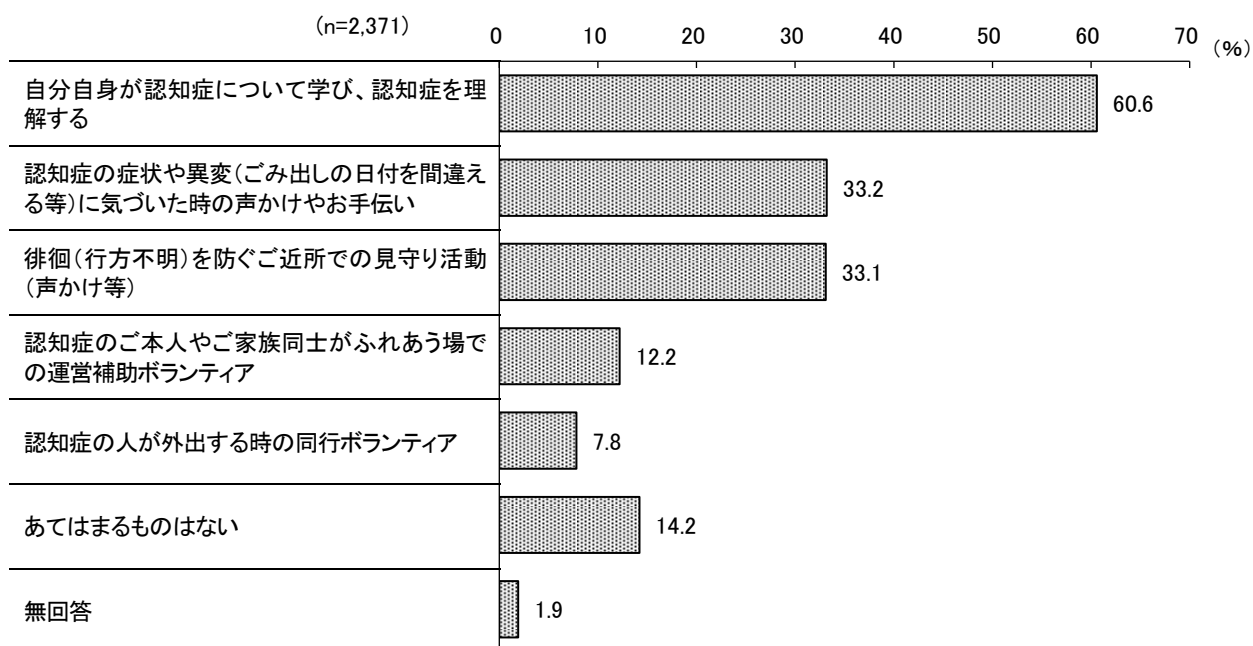
高齢家族の有無別にみると、「認知症の人はいない」は高齢家族がいない世帯で5割、高齢家族がいる世帯で4割半ばとなっている。「自分自身や家族・親戚に認知症(疑い含む)の人がいる(いた)」はいずれの世帯も4割である。「友人・知人・ご近所に認知症(疑い含む)の人がいる(いた)」は高齢家族がいる世帯で2割、高齢家族がいない世帯で1割を超えている。(表5-5-2)

(6) 認知症の人を支える活動

◎「自分自身が認知症について学び、認知症を理解する」がほぼ6割

問18 認知症の人を地域で支えるために、あなたはどんな活動ができますか。(〇はいくつでも)

図5-6-1



〈調査結果〉

認知症の人を支える活動について聞いたところ、「自分自身が認知症について学び、認知症を理解する」(60.6%)がほぼ6割で最も高く、以下、「認知症の症状や異変に気づいた時の声かけやお手伝い」(33.2%)、「徘徊を防ぐご近所での見守り活動」(33.1%)などと続く。(図5-6-1)

表5-6-2 認知症の人を支える活動(高齢家族の有無別)

									(%)		
		n	び、 自分 自身 が認 知症 を理 解す る	等 所 で の 見 守 り 活 動 (声 か け 近)	徘 徊 (行 方 不 明) を 防 ぐ ご 近)	づ し の 日 付 の 間 違 え や お 手 伝 い 気 出)	認 知 症 の 症 状 や 異 変 (ご み 出)	行 ボ ラ テ ィ ア が 外 出 す る 時 の 同)	ラ が 認 知 症 の あ ら う 場 で の 運 営 補 助 ボ 士)	あ て は ま る も の は な い	無 回 答
全 体		2,371	60.6	33.1	33.2	7.8	12.2	14.2	1.9		
高齢家族 の有無	高齢家族いる	1,066	56.6	33.2	34.1	7.1	11.0	15.5	2.6		
	高齢家族いない	1,273	64.3	33.2	32.9	8.4	13.1	13.0	1.0		

<調査結果>

高齢家族の有無別にみると、「自分自身が認知症について学び、認知症を理解する」は高齢家族がいない世帯が6割半ばで、高齢家族がいる世帯より高いが、その他は高齢家族の有無による違いはみられない。

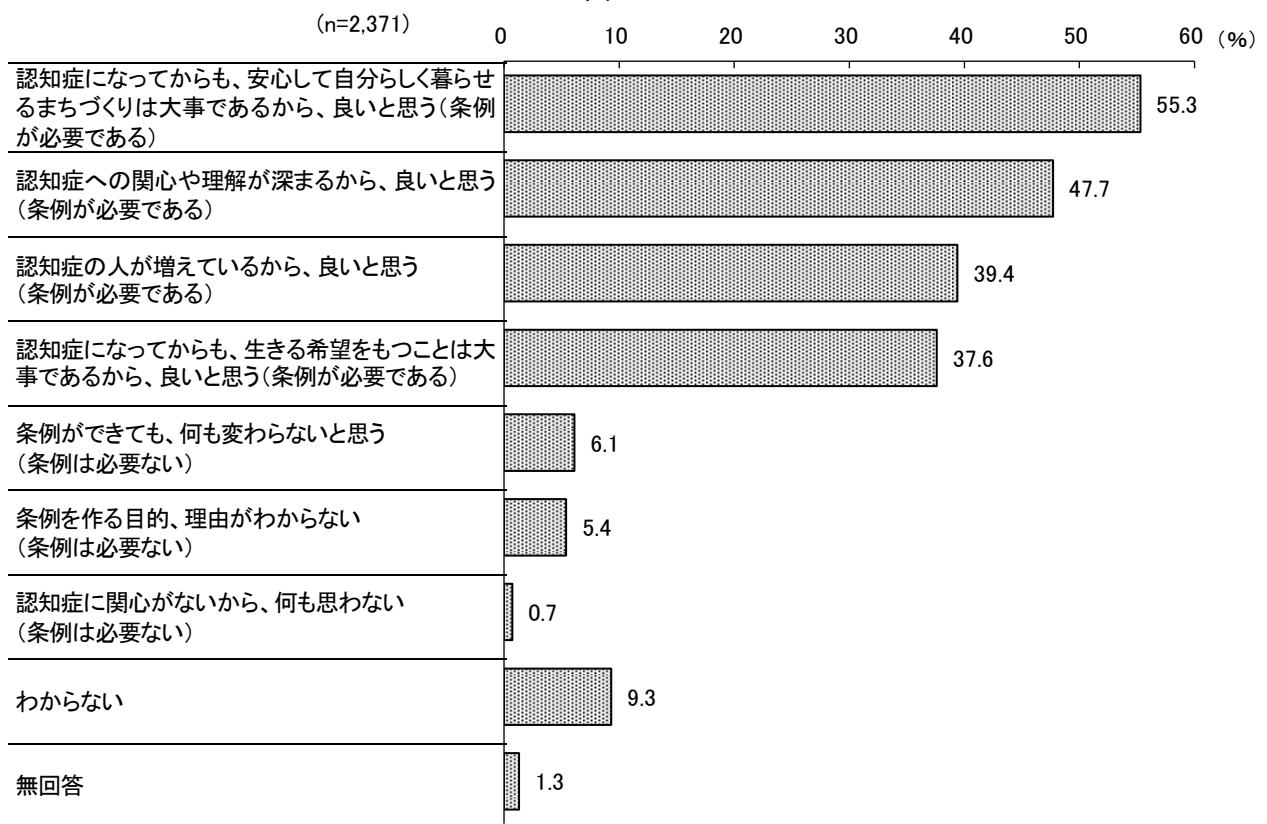
(表5-6-2)

(7) 「(仮称)世田谷区認知症とともに生きる希望条例」について

◎「認知症になってからも、安心して自分らしく暮らせるまちづくりは大事であるから、良いと思う(条例が必要である)」が5割半ば

問19 区では、認知症になってからも生きる希望をもつことができ、安心して自分らしく暮らせるまち、せたがやを目指した主旨の「(仮称)世田谷区認知症とともに生きる希望条例」を検討しております。あなたは、この条例について、どのように思いますか。(〇はいくつでも)

図5-7-1



<調査結果>

「(仮称)世田谷区認知症とともに生きる希望条例」について聞いたところ、「認知症になってからも、安心して自分らしく暮らせるまちづくりは大事であるから、良いと思う(条例が必要である)」(55.3%)が5割半ばで最も高く、以下、「認知症への関心や理解が深まるから、良いと思う(条例が必要である)」(47.7%)、「認知症の人が増えているから、良いと思う(条例が必要である)」(39.4%)、「認知症になってからも、生きる希望をもつことは大事であるから、良いと思う(条例が必要である)」(37.6%)などと続き、「条例が必要である」が「条例は必要ない」より高い。(図5-7-1)

表5-7-1 「(仮称)世田谷区認知症とともに生きる希望条例」について(性・年齢別)

		(%)										
		n	(認知症の人が増えてい るから、良いと思う (条例が必要である))	認知症への関心や理解 が深まるから、良い と思う(条例が必要で ある)	認知症になってから も、良いと思う(条 例が必要である)	認知症になってから も、安心して自分ら しく暮らせるま ちづくりは大事である から、良いと思う (条例が必要である)	認知症になってから も、安心して自分ら しく暮らせるま ちづくりは大事である から、良いと思う (条例が必要である)	条例を作る目的、理 由がわからない (条例は必要ない)	条例ができて も、何も変わらない と思う (条例は必要ない)	認知症に関心 がないから、何 も思わない (条例は必要ない)	わからない	無回答
全 体		2,371	39.4	47.7	37.6	55.3	5.4	6.1	0.7	9.3	1.3	
性・ 年 齢 別	男性全体	917	35.9	43.3	33.0	49.8	6.3	5.9	1.0	11.7	1.5	
	10・20歳代	104	19.2	29.8	21.2	37.5	7.7	7.7	3.8	17.3	1.9	
	30歳代	109	24.8	29.4	24.8	48.6	5.5	7.3	2.8	17.4	1.8	
	40歳代	177	28.8	50.3	35.6	46.3	7.3	8.5	1.1	10.7	1.1	
	50歳代	169	40.8	42.0	29.6	49.1	6.5	5.3	-	13.6	1.2	
	60歳代	143	44.1	49.7	34.3	51.7	8.4	4.9	-	6.3	2.1	
	70歳代	141	43.3	46.1	42.6	57.4	5.0	3.5	-	7.8	2.1	
	80歳以上	73	52.1	52.1	43.8	60.3	1.4	2.7	-	11.0	-	
	女性全体	1,411	41.7	50.6	41.0	59.3	4.7	6.1	0.5	7.5	1.0	
	10・20歳代	148	25.0	43.9	25.0	44.6	4.7	8.8	2.0	11.5	-	
	30歳代	191	29.3	39.8	31.9	48.7	11.0	9.9	0.5	9.4	1.0	
	40歳代	294	39.1	53.4	41.2	58.5	6.1	7.8	0.3	7.1	0.7	
	50歳代	272	48.2	55.1	48.2	61.0	2.9	5.5	-	7.4	0.7	
60歳代	194	49.0	51.5	43.8	68.6	2.1	1.5	-	7.7	0.5		
70歳代	179	48.0	53.1	46.9	70.4	2.8	4.5	-	3.4	1.7		
80歳以上	133	51.9	53.4	45.1	60.9	2.3	3.8	1.5	6.8	3.0		

<調査結果>

性・年齢別にみると、条例に肯定的な項目はいずれも女性の方が男性より高い。「認知症になってからも、安心して自分らしく暮らせるまちづくりは大事であるから、良いと思う(条例が必要である)」は女性の70歳代で7割、60歳代で7割近くとなっている。(表5-7-1)

表5-7-2 「(仮称)世田谷区認知症とともに生きる希望条例」について(高齢家族の有無別)

(%)

		n	う 認 知 症 の 人 が 必 要 で あ る か ら 、 良 い と 思 う (条 例 が 必 要 で あ る か ら 、 良 い と 思 う)	い 認 知 症 へ の 関 心 や 理 解 が 深 ま る か ら 、 良 い と 思 う (条 例 が 必 要 で あ る か ら 、 良 い と 思 う)	つ こ と は 大 事 で あ る か ら 、 良 い と 思 う (条 例 が 必 要 で あ る か ら 、 良 い と 思 う)	認 知 症 に な っ て か ら も 、 安 心 し て 自 分 ら し く 暮 ら せ る ま ち づ く り は 大 事 で あ る か ら 、 良 い と 思 う (条 例 が 必 要 で あ る か ら 、 良 い と 思 う)	認 知 症 に な っ て か ら も 、 安 心 し て 自 分 ら し く 暮 ら せ る ま ち づ く り は 大 事 で あ る か ら 、 良 い と 思 う (条 例 が 必 要 で あ る か ら 、 良 い と 思 う)	例 は 必 要 な い 目 的 、 理 由 が わ か ら な い (条 例 が 必 要 な い 目 的 、 理 由 が わ か ら な い)	条 例 が で き て も 、 何 も 変 わ ら な い と 思 う (条 例 が 必 要 な い 目 的 、 理 由 が わ か ら な い)	認 知 症 に 関 心 が な い か ら 、 何 も 思 わ な い (条 例 が 必 要 な い 目 的 、 理 由 が わ か ら な い)	わ か ら な い	無 回 答
全	体	2,371	39.4	47.7	37.6	55.3	5.4	6.1	0.7	9.3	1.3	
高齢家族 の有無	高齢家族いる	1,066	45.9	49.4	42.3	59.8	3.9	4.4	0.5	8.0	1.6	
	高齢家族いない	1,273	34.0	46.5	33.9	51.8	6.6	7.3	0.9	10.2	0.9	

<調査結果>

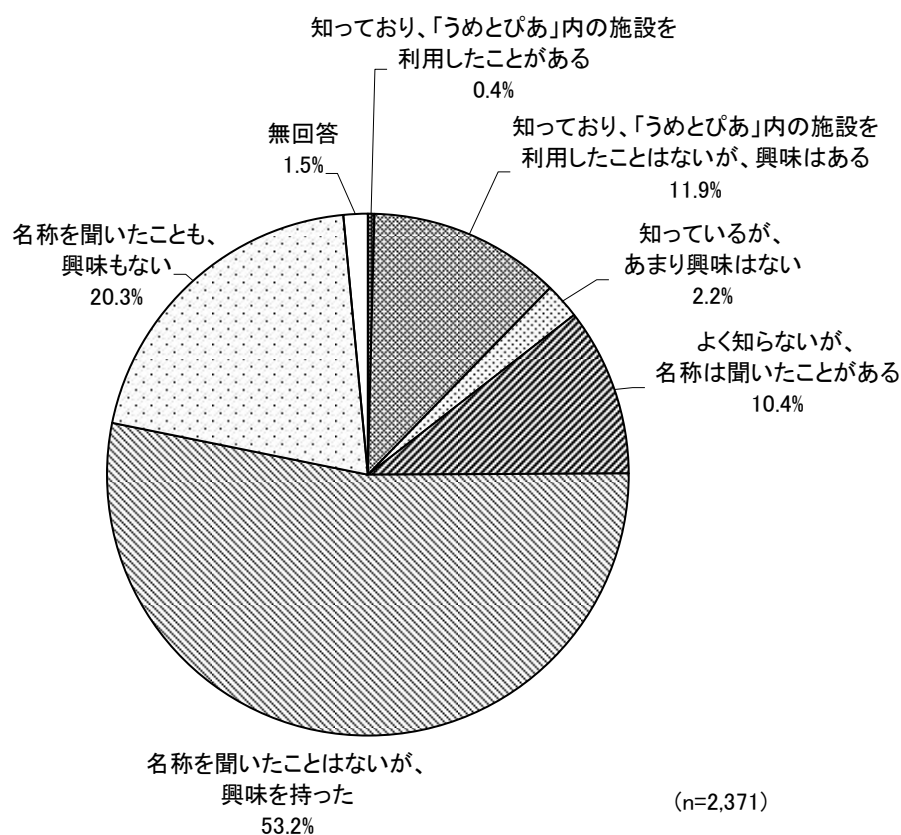
高齢家族の有無別にみると、条例に肯定的な項目はいずれも高齢家族がいる世帯の方が高齢家族がいない世帯より高く、「認知症になってからも、安心して自分らしく暮らせるまちづくりは大事であるから、良いと思う(条例が必要である)」は高齢家族がいる世帯で6割となっている。(表5-7-2)

(8) 「うめとぴあ」の認知度・興味度

◎ 《知っている》《名称を聞いたことがある》が2割半ば、《興味がある》は6割半ば

問20 あなたは、保健医療福祉の拠点「うめとぴあ」を知っていますか。また、興味はありますか。(○は1つ)

図5-8-1

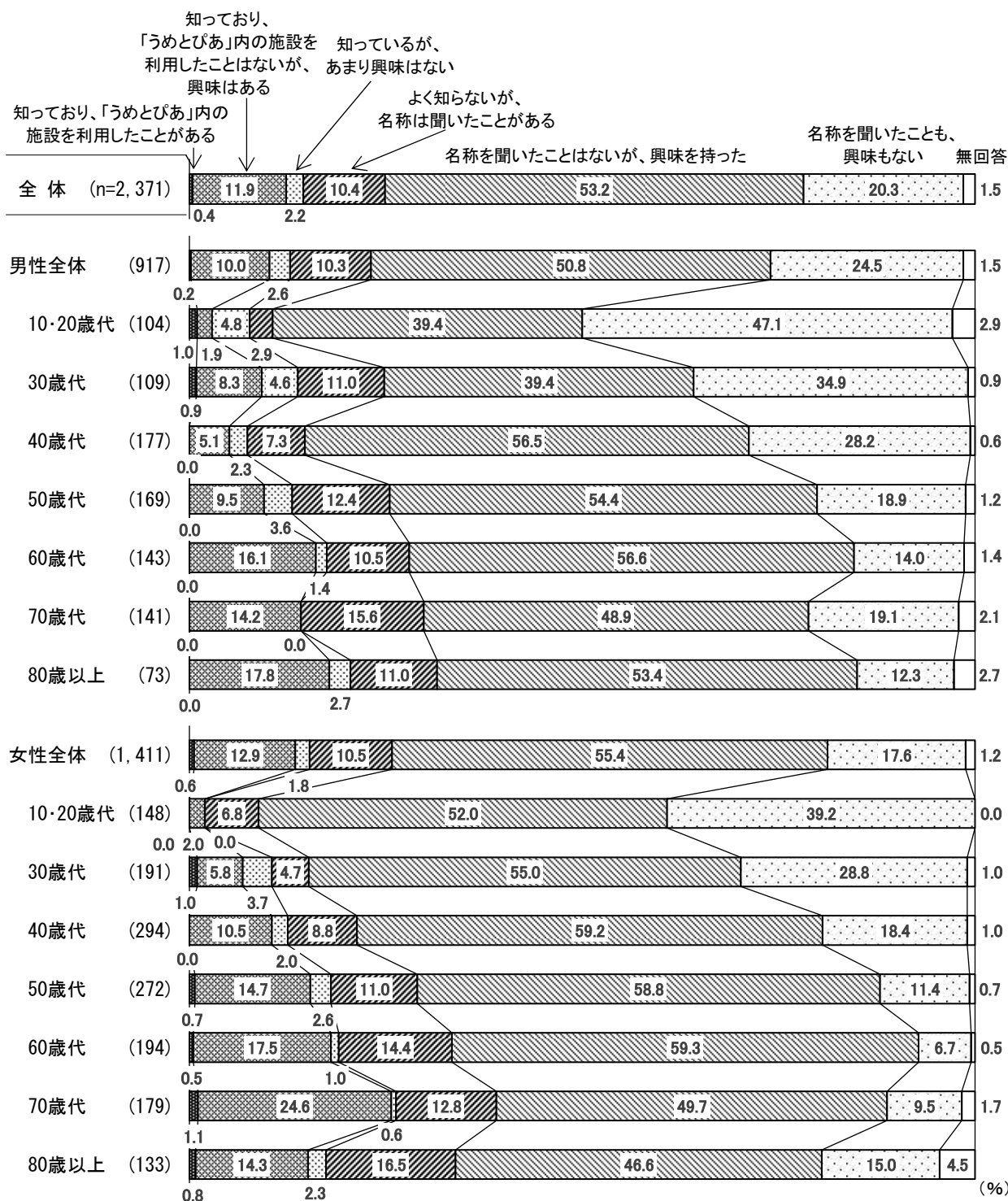


<調査結果>

「うめとぴあ」の認知度・興味度を聞いたところ、「名称を聞いたことはないが、興味を持った」(53.2%)が5割を超え最も高く、以下、「名称を聞いたことも、興味もない」(20.3%)、「知っている、『うめとぴあ』内の施設を利用したことはないが、興味はある」(11.9%)、「よく知らないが、名称は聞いたことがある」(10.4%)などと続く。名称を聞いたことがあるを含む認知率は2割半ばとなっている。

(図5-8-1)

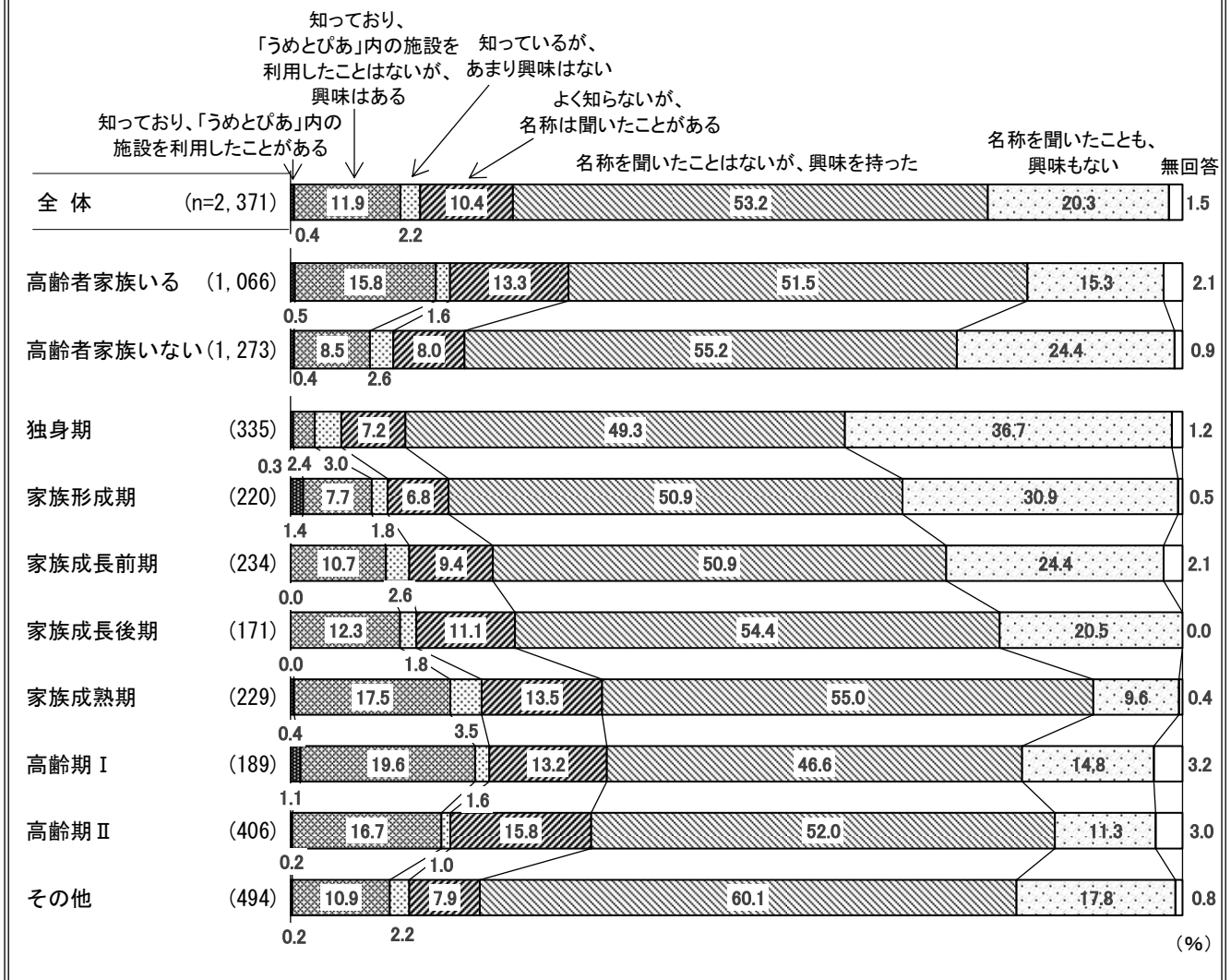
図5-8-2 「うめとぴあ」の認知度・興味度(性・年齢別)



〈調査結果〉

性・年齢別にみると、「名称を聞いたことはないが、興味を持った」は女性の40歳代と60歳代でほぼ6割、男性の40歳代と60歳代、女性の50歳代で6割近くとなっている。「名称を聞いたことも、興味もない」は男性の10・20歳代で5割近く、女性の10・20歳代でほぼ4割となっている。(図5-8-2)

図5-8-3 「うめとぴあ」の認知度・興味度(高齢家族の有無別・ライフステージ別)



〈調査結果〉

高齢家族の有無別にみると、「名称を聞いたことはないが、興味を持った」は高齢家族がいない世帯が5割半ばで高齢家族がいる世帯より高いが、「知っている、『うめとぴあ』内の施設を利用したことはないが、興味はある」は高齢家族がいる世帯が1割半ばで高齢家族がいない世帯より高い。

ライフステージ別にみると、「名称を聞いたことはないが、興味を持った」は家族成熟期と家族成長後期が5割半ばとなっている。「知っている、『うめとぴあ』内の施設を利用したことはないが、興味はある」は高齢期 I が2割、家族成熟期と高齢期 II が2割近くとなっている。(図5-8-3)